

# 身体って何だろう

## からだ、こころ、社会をめぐる考え方

---

総合図書館LS

人文学研究科人文学専攻臨床哲学専門分野M2

# 目次

- イントロダクション
- 古代から中世キリスト教における身体
- デカルトによる心身二元論
- メルロ＝ポンティと「自己の身体」
- マイノリティの身体：ジェンダー、障害、人種の交差点
- 生命・医療における自律性

問い：身体とは何でしょうか？

## 身体は墓である

- プラトンの身体の考え方『ゴルギアス』（プラトン, 2022）

心魂 = 心、精神という永遠不変なもの

知性 = われわれの目的

身体 = 欲望にさらされ、いずれは朽ちてゆく

- 我々の本当の生は魂が肉体から解放されること

身体を否定的に評価する立場、プラトン以降の西洋思想に大きな影響を与える

## アリストテレスによる質料・形相モデル

- 目的論的な身体（アリストテレス, 1968）

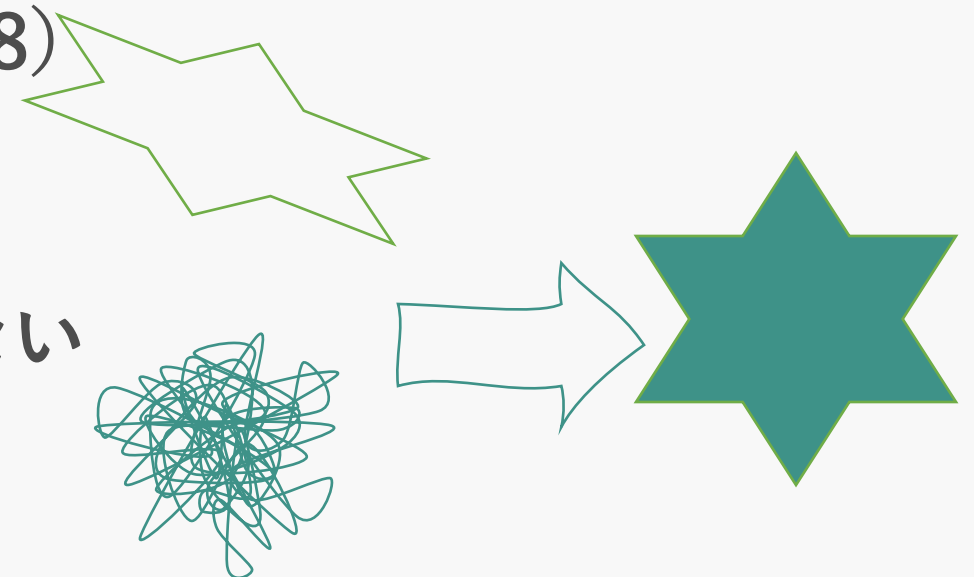
実体ousia=質料hyle + 形相eidos

どんな部位も霊魂なくして身体部位ではない

→心臓に精神/霊魂が宿る『**霊魂論**』

(ただしアリストテレスは霊魂だけでも現実態として存在可能とのべるため、彼の中で精神のとらえ方に揺らぎがある)

- 解剖学への影響：ガレノスの分析『**人体解剖論**』（ロンダ・シービンガー, 1996）



## 解剖学の発展

- キリスト教における身体

「復活の道具」と「欲望の/からの対象」というアンビバレント

神に連なることは霊魂によってのみなされる

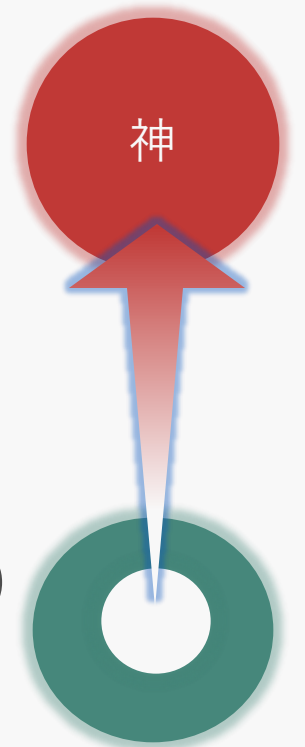
→肉の欲望という悪魔に通じる身体 = 弱点

→祈る人(聖職者)の禁欲：童貞の維持、自慰行為の禁止 etc.

- ヴェサリウスの『人体構造論』(ロンダ・シービンガー, 1996)

丁寧な解剖によるアリストテレス = ガレノスの超越

→科学 (科学革命) ・ 哲学 (二元論) の発展に貢献してゆく



## 心と体をいかにつなぐか：『情念論』

- デカルトの「心身二元論」 (デカルト, 2008)

コギト命題と合理的推論

：質的に同等なものの中によって推論されるべき

→精神/身体 of 現象は精神/身体によって分析

- 松果腺の発見

つらい時に涙が出る、嬉しくなって飛び跳ねる

身体 = 延長実体

精神

= 思惟実体

## 問い：デカルトの心身二元論は万能でしょうか？

- どんな時に納得できる／できない？
- デカルトの教え子エリザベートからの批判
- 歴史的な意義



## デカルト的二元論への疑義

### ● 幻影肢の症状：延長では語り得ない身体

事故で腕や足を無くした人が、ないはずの部分に痛みを感じることに

・ 心理学的な説明：いわゆるせん妄、妄想

→ 痛む個所に近い神経を閉鎖すると痛みがなくなる

・ 生理学的な説明：神経の齟齬

→ 物質的には存在していない神経が痛むのは説明がつかない



両方のアプローチに限界がある

## 身体図式の発見 (Merleau-Ponty, 1945)

### ● 現勢的身体actuelと現象的身体phénoménal

現象的(習慣的habituel)

現勢的(物質的matériel)

物質的な身体とそれを生気付ける身体図式

：身体心像※の概念に着想を得たメルロ＝ポンティが構想  
e.g.)紙の上での筆記を覚える

→筋肉の動きとして全くことなる空文字を書ける

→幻影肢の症状は、現象的身体に現勢的身体が追いついていない

※身体心像：自分の体がどんな状態かの心的なイメージ。  
19世紀を中心にシルダーという心理学者が定立。

## 世界へと広がる身体

- 現象的身体は肉体的な身体から拡張したり縮減したりできる

e.g.) 車の運転を覚えるとすれ違いの際に自分の身体のように幅がわかる

電車のつり革を掴むまで深く考えずとも腕を適切に伸ばせる

- 身体と空間を論じる可能性

→アイリス・マリオン・ヤング「女の子投げ」(Young, 2005)

：家父長制の下、女性の身体が客体化・対象化されることで空間に対して相対的に小さくなる

 世界と身体という関係を確認してみよう

## 社会の中で生きる身体：主体性のはく奪

### ①女性の身体

#### 家父長制下の存在

- 男性による所有  
(Mackinnon, 1991)
- 自己決定権のなさ  
ポルノグラフィ  
性暴力

### ②黒人の身体

#### 過度な暴力性

- ロドニーキング事件  
→ 黒人被害者が加害者へ  
歪められ認識される  
(バトラー, 1997)
- 小説での描かれ方

### ③障害者の身体

#### 病理的で狂氣的

- 18c以降の囲い込み  
(フーコー, 1986)
- 精神医学における  
治療の対象化  
e.g. 電気ショック治療  
自助グループ

## 身体と自己の権利

- ニュルンベルク綱領（西村, 2018）

：WW2の際にドイツ人医師らの非人道的な実験を弾劾する裁判をとおして作られた「許容されうる医学実験」の要点まとめたもの

- タスキギー梅毒実験（ibid.）

：アメリカで行われた1932~1978年にわたる梅毒の臨床実験。黒人男性らを中心に梅毒の進行経過を見るために行われたが、「治療処置」と詐称して梅毒に罹患させ、死亡したり重い健康障害に苦しんだりしても治療せずに病気の進行を追跡調査していた。

## 人体と倫理

- インフォームド・コンセントの必須化

説明と合意の意味。特に医療行為を受ける前に医療者によって十分な説明を受け患者がそれに合意すること。(吉村, 2018)

- 生命倫理における四原則の成立 (ビーチャム, チルドレス, 1997)

自律autonomy : 患者・被験者の自己決定性

公正justice : 施術や実験が公正なものであるか

無危害non-maleficence : 患者や被験者にダメージを与えないか

善行beneficence : なされる施術が利益になるか

## 自律性autonomyの限界

- 死者の身体

- ：誰に合意をとればいい？

- 幼児胚細胞の活用

- ：ES細胞をつかうことは倫理的に問題はない？

- 認知症

- ：患者の自律性をどこまで絶対視できる？

## まとめ

- 身体は皮膚で囲まれた物質的な肉体とはおなじではない
- 身体と心のとらえ方は論者によってことなる
- 身体が世界や他者とどうかかわるのかを考察することで社会を理解するヒントが得られる
- 身体の利用や医療の現場では、身体が個人のものとは一概にいいえないことがある



## 参考文献リスト

- アリストテレス著, 山本光雄訳, 1968, 「靈魂論」, 出隆監修, 『アリストテレス全集6』, 岩波書店
- ビーチャム, トム., チルドレス, ジェイムズ. 著, 永安幸正, 立木教夫監訳, 1997, 『生命医学倫理』, 成文堂
- バトラー, J. 著, 池田成一訳, 1993=1997 「危険にさらされている／危険にさらす 図式的人種差別と白人のパラノイア」 『現代思想』 25(11), pp.123-131
- デカルト, ルネ著, 谷川多佳子訳, 2008, 『情念論』, 岩波書店
- フーコー, M. 著, 渡辺守章訳, 1986, 『性の歴史1 知への意志』, 新潮社
- ロンダ・シービンガー著, 小川 眞里子, 財部 香枝訳, 1996, 『女性をもてあそぶ博物学ーリンネはなぜ乳房にこだわったのか』, 工作舎

## 参考文献リスト

Mackinnon, C., 1991, *Toward a Feminist Theory of the State*

Merleau-Ponty, M., 1945, *Phénoménologie de la perception*, Galimard (=2015, 中島盛男訳, 『叢書 ユニベルシタス112 知覚の現象学』, 法政大学出版)

西村高宏, 2018, 「第1章 生命倫理の基本構造」, 霜田求編, 『テキストブック生命倫理』 法律文化社, pp. 2-13

プラトン著, 中澤務訳, (2022) 『ゴルギアス』, 光文社古典新訳文庫

Young, I. M., 2005, *Throwing Like a Girl: A Phenomenology of Feminine Body Comporord University Pretment, Motility and Spatiality. On Female Body Experience: “Throwing Like a Girl” and Other Essays*, Oxfss, pp.27-45

吉村理津子, 2018, 「第2章 臨床倫理と医療におけるコミュニケーション」 『テキストブック生命倫理』 法律文化社, pp. 14-24